

殉職隊員にどう向き合う

～任務遂行に「命懸ける」唯一の公務員～

11月1日の自衛隊記念日にちなんだ中央観閲式や観艦式、音楽まつりなど、防衛省の秋は行事がめじろ押しです。来賓も多数参列して大々的に行われるさまざまな催しの中に、とても悲しい行事がひとつあります。それは「自衛隊殉職者追悼式」です。

「事に臨んでは危険を顧みず 身をもって責務の完遂に努め もって国民の負託に応える」。これは、自衛隊員が任官の際に行う「サービスの宣誓」の一節です。自衛隊員は、任務遂行に「命を賭ける」と宣言する唯一の公務員なのです。

実際、自衛隊の業務は訓練や普段の任務でさえ多くの危険を伴い、創設以来 70年ほどの間、ただの一度も戦闘を行っていないにもかかわらず、既に2千人を超える隊員が殉職しています。

本年度の式典は、昨年10月21日に岸田文雄首相の参列の下、市ヶ谷の防衛省において行われ、この一年間の殉職者26柱の名簿が新たに奉納されました。

追悼式に参列されるご遺族の方々は、大切な家族の一員を亡くされてまだ日が浅く、悲しみのただ中におられます。幼いお子さんが父の死を理解できないまま献花している姿を目にすることもあります。そんな時、涙をこらえることなどとてもできません。

家庭にあっては良き伴侶、優しい父や母、愛情を注ぎ慈しんできた息子や娘を亡くされて、なお気丈に振る舞われているご遺族の姿に接すると、いつも胸が押しつぶされるような思いにとらわれます。

20年ほど前の小泉純一郎政権当時、総理官邸に勤務していた私は、総理の追悼式参列のアテンドを担当しましたが、弔辞を読み上げ献花を終えて退出する際に涙ぐんでおられた総理の姿を、いまだに忘れることができません。

ところで、殉職隊員の追悼に関しては、いつも思い出す出来事があります。

2007年3月30日夜、沖縄・奄美地域の急患空輸を担当する陸上自衛隊第101へり隊(当時)に鹿児島県徳之島から救急患者の搬送を要請する連絡が入りました。これ

を受けて1機のヘリが沖縄県那覇駐屯地を飛び立ったのですが、あいにくこの日は現地に濃霧が立ち込めていました。夜間、しかも悪天候の中、患者を救おうと何度も着陸を試みるうちに、不幸にもヘリは同島天城岳に墜落し、乗員4人全員が残念ながら命を落としたのでした。事故から約2週間後の4月15日、当時の安倍晋三首相も参列して那覇駐屯地で営まれた部隊葬は、首相のみならず連立与党の幹部や野党第一党の党首が居並ぶ異例のものとなりました。ちょうど参議院沖縄選挙区の補欠選挙の応援のため、与野党の国会議員が大挙して来県していたのです。そんな背景はあつたにせよ、「救急患者を助けようと奮闘し、志半ばで殉職した隊員たちの葬儀を素通りするわけにはいかない」という気持ちはひしひしと伝わってきました。

実はこの日、もう一人、ある野党の党首が参列を予定していたのです。反戦平和を標榜し自衛隊批判を繰り返してきた政党だったので、「参列したい」との連絡を受けた時には正直驚きましたが、殉職者を悼む気持ちは尊いものなので、部隊は万全の態勢を整えてお待ちしていました。

しかし、当日、党首が会場に姿を見せることはありませんでした。参列取りやめの経緯は知らされなかったのでわかりません。

私は「戦ったわけじゃない。病人を助けようとして殉職した隊員に、政治的立場はどうあれ花の一本も捧げてくれないのか」とやり切れない思いに襲われました。

太平洋戦争への反省から平和国家への道を歩み出したわが国が、どのように国を守るのか、自衛隊をどう考えるのかについて、様々な意見があるのは当然です。殉職隊員を追悼する気持ちは、個人の自然な思いから発するものであり、誰かに強いらるべきものではないことも理解しています。

その上で、愛する家族がありながら、命がけで急患空輸に当たり、不幸にして殉職した隊員に対し、あるいはそのご家族に対し、我々はどのように向き合うのでしょうか。これを機に、読者の皆さま一人ひとりにじっくりと考えていただければ幸いです。

(山形新聞 2024年1月23日付「直言」欄からの転載)